

紫友

SHIYU

同志社校友会 北海道支部機関誌 再刊第3号

The 1st GRAND REUNION 同志社校友会 大懇親会



校友会北海道支部総会の開催を祝して

同志社大学 学長 村田 晃嗣



校友会北海道支部総会が盛大に開催されますことを、心からお慶び申し上げます。平素は、本学に対しましてご厚情、ご支援を賜わり、誠にありがとうございます。教職員を代表いたしまして厚くお礼申し上げます。

同志社大学は、1875年に同志社英学校として誕生しました。以来、校祖新島襄が『同志社大学設立の旨意』で宣言しているとおり、自治自立の精神に富み、自由を尊び、良心を手腕に運用する力強い人物の輩出を願い、教育研究活動を展開してまいりました。そして今、より個性的で特色ある私学であり続けるために、時代に即応した様々な改革に取り組んでいます。

国際主義を建学の精神としている本学にとつて、国際交流、国際化は現在取り組むべき重要な課題です。2009年度に英語のみで学位が取得できるビジネス研究科グローバルMBAコースを、2010年度にはグローバル・スタディーズ研究科を、理工学研究科及び生命医科学研究科に「国際科学技術コース」を開設、更に2011年度には文系学部を横断する国際教育インスティテュートを開設するとともに外国語の実践的・実用的運用能力に卓越した人材を育成するグローバル・コミュニケーション学部を開設、そして2013年4月、国際的な地域理解能力を持つ人物の育成を目指してグローバル地域文化学部を開設いたしました。学生・研究者を世界中から受け

入れ、また、世界中に派遣する魅力ある知の国際化拠点「同志社大学」の形成に向けて、積極的な活動を行っています。

また日本には780もの大学がありますが、その中でも同志社大学はまさにユニークであり特徴ある存在だと考えています。同志社大学には三つの特徴があります。第一は、京都に位置しているということです。全国の大生のおよそ4割が首都圏の大学で学んでおり、高等教育の世界は首都集中といえます。もちろん、首都圏で学ぶことのメリットも大きいでしょうが、首都圏以外の多様な視点から社会を考察することは実に重要です。特に、学生が伝統と革新の共存する京都で青春時代を過ごすことの意義は、決して小さくありません。

第二に、同志社は私学だということです。本日お集まりの皆様が学ばれました同志社大学には、創立者・新島襄の教育理念が生きて続いています。明治政府がいわゆる和魂洋才で、日本の近代化のために西洋の技術や制度だけを模倣しようとした折に、新島は西洋の技術や制度を支える市民社会の重要性を訴え、その市民社会を構成する賢明で自立的な市民、つまり「良心を手腕に運用する人物」を育成しようとしたのです。幕末に国禁を犯して単身アメリカに渡り10年余をそこで過ごした新島だからこそその発想でしょう。本学学生には、ぜひ新島について知ってもら

いたいと考えています。新島について知ることは、近代の日本、同志社、そして、われわれ自身の来歴について知ることでもあるからです。

第三は、同志社がキリスト教を教学の基盤に据えているということです。明治以来今日に至るまで、日本の人口に占めるキリスト教徒の割合はわずかに1%にすぎません。他方、国際社会ではキリスト教人口は22億人にも上ります。キリスト教の視点から社会や物事を考察し、キリスト教については一定の理解や知識を有していることは、多様性と国際性の両方に通じるのです。同志社の徽章、三つ葉のクローバーは知徳体を表していますが、同時に、京都、私学、キリスト教という同志社の三つの特徴に見立てることもできるかもしれません。そして、その共通するものは、多様性であり、寛容の精神であり、自立心です。これらなしに21世紀のグローバル社会をクリエイティブに生き抜くことはできません。同志社は伝統ある学校ですが、その特徴や教育目標はきわめて今日的でもあると考えています。

最後になりましたが、本日ご列席のみなさまが、この場を通じて相互の交流をより一層深められますとともに、新島の願いを精神的支柱に、今後ますますご活躍されますことを心からお祈り申しあげます。

第一回「校友会大懇親会」に参加して

支部長 山川 寛之（1969年経済学部卒）



同志社校友会の改革が進み、井上新会長体制による3年間の集大成の意味から開催された大懇親会が無事終了、今は、ほっと一息ついていきます。校友会理事の立場からも絶対に、失敗は許されなかつたが、結局二千名以上の全国の校友が集合し、大成功でした。お陰様で北海道からもかつての懐かしい仲間達、地元の方々も含め二十名以上に参加頂き誠に有難うございました。草野幹事長の機転から支部の旗まで持参頂き、地方支部としては、人数もさることながら、結束の強さ、目立ちの度合いは群を抜いていて流石でした。ご参加頂きました皆様、ご家族も含めまして、本当に有難く心よりお礼申し上げます。

益々厳しさが予想される大学間の生き残り競争の中で大丈夫なのか、と感じたのは、私一人ではなかつたと思えます。世の中の変化が早く激しいのに今迄と同様のテンポで果して上手く適応して生き残り、グローバルな競争にも打ち克つて一層の発展が可能なのだろうかという単純な思いです。過日、日経新聞で長崎大学の改革特集記事を偶然拝見したのですが、成功の要因は大学長によるトップダウンの急改革です。村田学長に絶大な権力を持つて頂き改革をスピーディーに果敢に行なえるガバナンスの下、同志社大学を大改革して欲しいと希望する処です。その為には、学外に学長を支援する第三者による改革委員会があると効果的とも考えます。一考願いたいものですが皆さん如何でしょうか。

今年、校祖新島襄が脱国して一五〇年の節目の年です。来る6月14日（土）函館で碑前祭が行なわれる予定です。札幌からも大挙参加し、大成功させる為お一人でも多くの方々のご参加をお願いして、私のお話しを閉じさせて頂きます。今年度もどうぞ校友会北海道支部の活動に一層のご支援ご協力をお願い申し上げます。

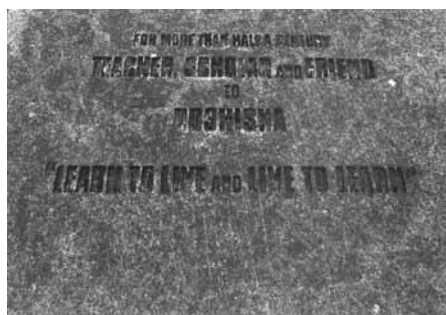
「京をいく」

小西 康雄（1969年法学部卒）



いま若王子山頂に立つ。明治二三年一月二七日、学生が棺を奉じてこの山に登った朝は晴天であつたが、葬列の始まる頃から雨模様、夕方には氷雨が雪に変わったという。幸い今日は杉木立を分けた陽光が勝海舟の筆になる五字を映し出している。新島襄・八重夫妻と山本覚馬、デイビス、徳富蘇峰などが眠る傍らにラーネッド博士の墓があり「DOSHISHA LEARN TO LIVE and LIVE TO LEARN」と記されている。

若王子の眼下に南禅寺があり、その三門のすぐ右横に天授庵がある。ここには山本覚馬の娘であるみねの墓がある。新島襄も初めここに葬られる予定



LEARN TO LIVE and LIVE TO LEARN

泉下にあつて先人は、いま繁栄の京都をどのように見ているのだろうか。東山界隈を俯瞰したので、その対をなす「仁和寺八十八カ所巡り」にいく。ご存知四国のそのミニコース版。私から一分もかからずその入り口に立つ。「若王子」の坂よりは少しきついが男の足なら一時間余で巡れる。山



黒谷さんから京都市内を見る

頂付近で南に大きく開け、京都市内はもとより大阪方面までも望む。新島先生もこの大パノラマに思索の時をすごしたのだろうか。仁和寺と「徒然草」。その五二段目には誤った石清水参拝をしてきた仁和寺の坊さんを揶揄して「少しの事にも先達はあらまほしき事なり」とある。「新島襄」という人生の先達を青春にもてた私達は幸せであった。



仁和寺五重の塔と御室桜

吉田兼好は仁和寺に近い花園に住み長泉寺に墓があるが公開していない。その前に小さく「オムロン」創業の碑がある。「御室ン」である。今や世界的企業の翔ぎの原点は御室にあった。花園には平安末期、待賢門院彰子が再興した法金剛院があり、彰子と親戚筋の西行も何度か訪れた。「願はくは花の下にて春しなん その如月の望月の頃」。ここは花の寺としても名高く、今まさにそのときを迎えている。

街中に戻り丸太町を上ると京都府庁がある。この旧本館中庭に「容保桜」(かたもりぎくら)がいまも歴史と季節を伝えている。二条城前の京都国際ホテルには京都守護職屋敷正門が移築



道元の歌碑(京都国際ホテル)

されているがその中庭に、川端康成が「日本人の心」として世界に紹介した道元の歌碑が立つ。「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪冴えてすずしかりけり」。京都は確かに猛烈に暑くそして寒い、ひとつ井戸を掘ればまた新たな水脈にいき当たり、年中興味尽きない街である。この国際ホテル、今年のクリスマスマスを境に閉鎖する。ここにも歴史の流れがあるようだ。

そして、同志社にいまも立つ良心碑



良心碑(同志社大学)

「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」。四十九年前の春、初めて覚えた感慨を胸に、今日もあしたも、京をいく。

(京都・御室在住)



農業サポーターの楽しみ

丸谷 和豊(1965年法学部卒)

春から夏にかけて週五日は南区(住んでいるのは西区)に通っている。北海道の遅い桜が散って五月中旬を過ぎると、八剣山の麓は、桜桃とリンゴの花が一面満開となる。十月半ばの紅葉の秋まで豊かな自然と実りが、農業サポーターの私たちを和ませてくれる。

「札幌に農業」と言うと、げげんな顔をする人も多いだろう。都市化の進展で、だいぶ少なくなつたが南区にはまだ数十戸の農家がある。五十種類を越す野菜、サクランボ、リンゴ、ブルーベリーなどの果物が豊かに実る。果物だけだと、札幌の全生産物の八七%が南区産。戦前の北海道は青森を凌ぐ日本一のリンゴ王国。札幌はその主産地だった。かつては道庁前庭にもリンゴがたくさん植えられていた。ラベンダーの発祥地も東海大学のある南の沢付近(碑がある)。道开拓使のお抱え外国人、エドウィン・ダンが牧牛場(真駒内牧牛場)やバター・チーズの製造など北海道酪農の基礎を作つたのもこの南区からだ。

農業サポーターの一つは「ふぞろいの北の野菜と果物を応援する会」。通称・ポロの会。2008年、仲間九人で作つた(現在は賛助会員含め約六十

名)。私たちの食卓に載る野菜や果物は形の整つたきれいなものばかり。実際に畑で取れるものはそうでない。曲がつたものや少々虫の食つたものなどが自然な状態。流通の都合でL、M、Sなど規格に合つたもののみが流通する。これに合わない全生産物の約三〇%は除外、廃棄され、店頭に出回らない。「十分食べられるのにもつたいない」と農家数戸から規格のない無選別の形で野菜を買い取り、南区川沿の旧道茶屋で週末(土・日)限定の「ポロの八百屋」を始めた。

すべて朝取り、新鮮そのもの。少々、虫が食つていたり、曲がつていても、「食べても何の問題もありませんよ」と丁寧の説明すると、お客さんは買つてくれる。生協やスーパーの野菜は前日までに収穫したものがほとんどだから、ポロの野菜はどこよりも新鮮。実際に「美味しいから」とリピーターが増えた。三年ほど経つてコープさつぽろが「規格外でも売れるんだ」と自覚? 「ご近所野菜」や「武骨野菜」というコーナーを設けてくれるようになってきた。ポロの会と提携する農家の「規格外野菜」も生協に集荷出来るようになり当初の目的はほぼ達成。八百屋業は

ひとまず終了した。

今はせつせと農作業の手伝い。南区の農家はほとんどが家族労働。作業の手が回らさないと場所が多い。それではということ、会員、賛助会員、市民や学生から「援農隊」を募集、四月末から十一月半ばまで農作業の手伝いに出掛ける。

作業の内容はさまざま。春先のビニールハウスのビニール架けに始まって、野菜苗の定植、肥料やり、田植え、雑草取り、トマトの支柱立てや芽欠き、イチゴ畑の畝(うね)床づくり、傷んだサクラランボの除去、ブルーベリーにつく毛虫取り、稲刈り、収穫を終えたトマトハウスの後片付けなど。年間の出動回数は約六十回。定年後や主婦など六〇〜七〇代の人も多いことから、作業は午前八時開始、正午頃の半日で終える。適度に体を動かし、きれいな空気を吸っての作業は爽やかだ。農家の日頃の苦労や食べ物をつく



り出すことの大変さが分かって、感謝の気持ちで自然と沸くのは、何にも増して代え難い。

決めていることは、参加者の自宅から現地までの交通費実費だけは農家に負担してもらい、日当的なものは一切頂かない。時に取れたての野菜を頂くが、これも楽しみの一つだ。双方に負担をかけない。これが長く続いている秘訣だろう。

もう一つは「南区の果樹と農業を考える会」。愛称・ぶどうの会。二〇一一年九月に発足した。農家と、さまざまな分野の市民二十七名が会員だ。他に資金で支援する賛助会員が三十人ほどいる。南区の豊かな農作物、それに加え、温泉(定山溪、小金湯)、手頃な登山が楽しめる空沼岳、札幌岳、八剣山などの自然資源をうまく活用し、市民の憩いの地にしよう。最近では豊平川で増水期の一時期だけだがラフティングも出来る。様々なイベントを組むことで、現地に人が来てくれ、作物を買ってもらうことで農家も潤い、地場経済も循環する。

実際にやっていることは、夏場の会員農家の農園を舞台にした「農縁プロジェクト」。農園に来て頂き、園主に農園の概要や、栽培する上でのこだわりを説明して貰う。季節に合わせての簡単な農作業体験も組み込む。お昼には農家で採れた旬の作物を使って食事、農園を体と舌で体験する。地場の農家の奮闘ぶりを丸ごと知ってもらお

うという試みだ。これまでに六農園で実施した。

冬場は、地域の魅力を発掘し、参加者とともに考える「南区塾」という講座を毎月行っている。二〇一一年十一月、三部英二札幌市農政部長「札幌の農業と南区農業の多様性」を皮切りに、上野昌男(定山溪観光協会会長)「温泉など地域資源をどう活かす」、森久美子(作家、エッセイスト)「都市近郊農業の魅力と役割」、七島ひとみ(狸小路HUGマート店長)「小さな流通

から見えてくる道産食材の素晴らしさ」、渡辺一史(フリーライター)「北海道の無人駅から」の著者)「北海道に各地を取材して、地域の歴史や思いに触れること」など各分野の講師からお話し願っている。このほか催しとして、「青空市」や「サクラランボ祭り」なども行っている。

これから力を入れたいのはCSA(COMMUNITY SUPPORTED AGRICULTURE)地域で支え合う農業)の南区での展開。大規模農業が当たり前のアメリカで、

農作物の安全性などに疑問を持つ都市近郊住民が、CSAに活発に取り組んでいるという。一言で言うと、同じ地域内に住む、農業者と消費者が、農業の恵みとリスクを分かち合うことを目指した「農・消連携」だ。空知の長沼町で「メノビレッジ」を経営しておられるエップ・レイモンドさん・荒谷明子さんご夫妻に二月の南区塾で話してもらったのを機に、検討会を立ち上げた

と思っている。昨年来、北海道で大問題となっているTPP(経済連携協定)が締結されたら、北海道農業と一般消費者の生活はどうなっていくのか。今のところ誰も見通せない。どういう事態になっても、地域での農業者と消費者が互いに理解仕合い、連携するCSAのような結びつきが、都市近郊農業を維持し、私たちの食卓を守ってくれる。本来、農業や食とはそういうものだったと思う。

百一歳の日野原重明さんには及ぶべくもないが、人生に定年なし。体の動くうちは、農業サポーターの日々を楽しみたい。

徒然なるままに

幹事長

草野

賀文(1984年法学部卒)

私が校友会活動に携わって早25年。途中山川さんが校友会活動から少し遠

のいた時期に私も少しばかり距離をおいていた時期がありますが、その殆ど

を山川さんと一緒に活動して来ました。生来生意気な性格故あまり「先輩」を意識したことが無く、同様に「後輩」の別を抱いたこともありませんが、先輩達には失礼かもしれませんが、皆人生の「友人」だと思っております。その中でも高田さんや山川さんの知己を得たことは私の人生に大きく影響しました。

近年、当支部からホームカミングデーの物産展や大懇親会出席の命を受け（と人には言っていない）入浴の機会が増えております。その実、同期・下宿時代の友人、想いを寄せた人との再会、最初の勤務先である堀場製作所時代の仲間達、そして私の大恩人倉敷先生（大学時代の恩師 元スキー部顧問）に会うのが目的。筋の通る美味しい仕掛けを背景に京都を暗躍しております。

平成19年のホームページ（以下HP）のリニューアルから、武田さん（事務局長）が私の相棒になってくれました。「どっちが先輩だか後輩だか判らない」（勿論武田さんが先輩）と家内から揶揄されながら、HP更新、年間スケジュール、他クラブ応援、ホームカミングデーの物産展、ゴルフ会用ユニフォーム製作、総会・クリスマスマス会、函館弾丸ツアーから予算計画まで、決めたことは即実行・文字化と武田さんの仕事はスピーディで抜けが無い。名簿の電子化においては武田さんの職業知識を存分に活用させてもらい

ました。武田さんには悪いのですが本当に良い女房役。亭主のお粗末さを後ろに、なんとか体裁を保っているのは武田事務局長のお蔭です。

運営について腐心していることは、仕事として受け入れることが可能な友人には極力仕事をしてもらうことです。又広報や宣伝活動に利用できるなら、最大限利用してもらうことです。各人の居場所を作り出すために、利用する側と利用される側を上手に取り持つことが私にとつての最大の仕事になっております。我々にとつて大変貴重な情報やノベルティ商品も簡単に拠出することのできる校友がおります。アンテナを張り巡らし神経を集中することにより成就できることからの多いことに我が組織の偉大さをいつも確認しております。

北海道支部の構成員は約500名。この内私が顔と名前の一致できる方は150名位かと思えます。この規模が組織としての輪郭も備え、オペレーションもし易く、融和も図りやすいと思っております。言い換えればこんなに頃合いのいい集団は作ろうにも作れないと言うことです。勿論私の使命はより多くの校友を集め、懇親を図り、仕事や憩い、人生の友人作りの橋渡しをすることにあります。他人のこまばかり気にしているように書いておられますが、この恩恵を一番受けているのは私自身であることに随分前から気がついております。

HPリニューアルの折、武田さんがメールリニューアル（以下ML）を作ってくれました。ご存知の通り登録者全員にメールが配信される閉鎖された環境の通信手段です。発信者にとっては好都合な、受信者にとっては迷惑な仕掛けの断片があります。このML発信回数が一番多いのは勿論私です。例え等の呼びかけに受信者一覧を載せ返信があるまでしつこくメールを打ちます。こんなに迷惑な事はありませんが、不思議と「MLはもう勘弁してくれ！アドレスも削除してくれ！」とクレームを受けたことがあります。私の横暴さに屈したのか、諦めたのか。同志社人の度量の大きさと寛容さに幹事長職がようやくと務まっています。皆さんありがとうございます。

2013年から、校友会本部が補助金を出してくれるようになりました。2年に1度更新する会員名簿の広告収入が活動の原資となっていました。が、今後の校友会活動の幅が広がることは間違いなく、大変嬉しく思っております。そして忘れてならないのはこの25年の間に多額の寄付をして下さった方々が居ることです。故三好支部長の奥様の和子様、高田前支部長、加藤前副支部長からは多額の寄付を頂いており組織としての体を現在の形にすることができました。心から御礼を申し上げます。

話題は変わりますが、私は現在関西六大学札幌OBゴルフ対抗戦の事務局

を仰せつかっております。HPに詳述されておりますが、この礎を築いたのは高田前支部長と山川現支部長そして関学の藤井さんです。今年で15回目にありますが、青春を関西で過ごした他大学の仲間とワイガヤでゴルフをするのは何とも楽しいものです。知人の輪は極端に広まり、東京六大学を意識するものの圧倒的に関西六大学の横の繋がりは強固なものと思っております。またここに集う各校の幹事たちほどの方も行儀よく、楽しい時間を与えて下さいます。幹事やら事務局やら忙しくしているように振る舞っておりますが、私だけが「こんなに良い思いをしていいのか」時折反省とも懺悔ともとれる感慨に浸ることがあります。皆さんも是非輪の中に入って来てはどうでしょうか？

徒然に文章を進めると際限なく書いてしまおうなので、程々で筆を止めることにしますが、最後に皆さん……京都に行かれてはどうでしょう？ こんなにたくさん京都へ行く口実があります。京都の市バスは500円で1日乗り放題のシステムがあり、京都での生活経験を持つ我々にとつてはの上なく便利な乗り物になっており何処にでも運んでくれます。そして京都で北海道の仲間と再会することは校友会活動に携わった者としてこの上なく幸せな一時を味わえるのです。さあ、みんな京都へ行こう。

「留岡幸助をご存知ですか？」

肥田 信長（1997年 神学部卒）

留岡幸助という人物をご存知でしょうか？知る人ぞ知る存在ですが、宗教家であり社会事業家である同志社の大先輩です。北海道ともつながりが深く、遠軽町にある北海道家庭学校の創始者でもあります。今回機会が与えられましたので、ぜひご紹介したいと思います。

留岡幸助は、現在の岡山県高梁市で1864年に生まれます（この年の6月14日に新島襄は函館から脱国）。吉田

万吉、トメの6人兄妹の次男として生まれましたが、生後すぐに米屋を営む留岡家に養子として出されます。子ども同士の喧嘩で武士の子どもにも怪我をさせたことが原因で、米屋の商いに影響が出てしまいます。そのため、養父から折檻され家出をしてしまいます。

そして、逃げ込んだ先が、日本基督組合教会（現日本キリスト教団）高梁教会でした。その経験がきっかけで、18歳の時に洗礼を受けるに至りました。

1885年に同志社英学校別科神学科に入学し、新島襄からの教えを受けます。同志社を卒業後の1888年には、牧師として京都の福知山市にあった丹波第一教会に赴任します。

3年後の1891年には、金森通倫の勧めもあって、現在の北海道三笠市

にあつた空知集治監の教誨師（受刑者の精神的救済を行い、更正の役割を担う刑務所職員）として働く中で、1894～1897年にアメリカの監獄で実習を行うために留学の機会が与えられました。その留学の学びの中で、日本の集治監で子どもから大人までと一緒に収監されている状況が、子どもたちにとって、どれだけ悪影響を及ぼしているのかを学びます。

帰国後、日本国内でも少年更正のための感化院（児童自立支援施設）を設立したいという思いを強く持つて、資金調達に奔走します。1899年に資金調達の目処がつき、東京巢鴨に家庭学校（現、東京家庭学校）を設立しました。そして、新たな教育の理想を求めて、1914年に北海道上湧別村字社名淵（現、遠軽町留岡）に家庭学校分校を設立するに至りました。

この留岡幸助の働きが、現代ぶろだくしよんによって2011年映画化されました。北海道と岡山でロケを行い、『大地の詩』留岡幸助物語』として発表されたのです。この映画は、同志社校友会北海道支部でもチケットの後援を行い、たくさんの校友にチケットの販売協力していただきました

た。その結果、映画のエンドロールに協力者として校友会の名前が出ていました。実は、この映画に私自身も、名もない出演者（エキストラ）として看守役と教会の信徒役の二役で出演しています。留岡役の村上弘明さん、妻夏子役の工藤夕貴さんと開拓の村の撮影現場で一緒に過ごさせていただきました。さすがプロ。長い台詞も、台本をほとんど確認せずに、臨んでおられました。まだ時折ですが、上映される機会もありますので、北海道でチャンスがあつ

北海道家庭学校訪問記

船津 多香子（2000年 経済学部卒）

2012年6月3日、私は北海道家庭学校を訪問する機会に恵まれました。訪問に際し設立趣旨を理解し、1914年にこのような先進的な更正施設が設立されたことに驚きました。訪問してまず驚いたのが、自然に囲まれた広大な敷地と開放感でした。更正施設と開放感というワードは相反する言葉と認識されているかもしれませんが、ここではその二つが両立しています。校内は木造で温かみがあり、施設内の立派な礼拝堂では心が静まりました。

仕事柄悩みを抱えた少年達と向き合う機会があります。彼らに必要なこと

た時には、お知らせしたいと思います。



村上氏の隣にちゃっかり写ってポスターにも使用されました。

は厳格な管理監督ではなく愛情と精神の自立だと感じます。北海道家庭学校は忍耐強く自立を備えさせる教育を実践されています。開放的ゆえに学校関係者の方々のご苦労は多々あるかと思いますが、ここから育つ少年達が更に後輩の少年達に夢を与えてほしいと強く願います。校長から学校運営の問題点として寮長と寮母（夫婦雇用が原則）の成り手が少ないと伺いました。少年達にとつて寮長と寮母は親の一面もあり大変重要な存在です。社会で経験を積まれた人間味ある方々こそが多くの少年達の学校の親となつてほしいと心から願います。



同志社——新しい普遍性

小田切 拓 (1992年文学部卒)

「国家」とは、築くもの

「イスラエルにとって最も重要な出来事の一つが、現在の我が国を代表する(国家基盤たる)主だった Institute 、『専門教育機関』が、(1948年の)建国前に誕生していたことだ。」

4月6日、私は、ニューヨーク・マンハッタン中心部に約15000人を集めて開催されたイスラエル関係のイベントに出席していた。イスラエルの現役主要閣僚数人も発言するこのイベントの冒頭で、ノーベル平和賞受賞者

でイスラエル大統領のシモン・ペレスがビデオメッセージで述べたのが上のコメントだ。イスラエルの建国を支持するユダヤ人が、如何に人材育成に力を注いでいたかが伺える。

同メッセージ中で紹介されたヘブライ大学は、イスラエルの東大的な名門校であり、設立は1924年である。世界のハイテク産業を牽引するイスラエル工科大学は、1912年で、オスマントルコの統治期に当たる。1923年には、アインシュタインが支援のため訪れたという記録もある。

60万人)。それが100年後の現在は、(イギリス委任統治時代の)パレスチナの地の約80%を領有している。その他の20%余りが所謂パレスチナ自治区であり、イスラエルが今も軍事統治下に置いている。

イスラエルとは、偶然に誕生した国家ではない。現在の状態に至ったのは相応の理由が存在する。戦略が、イスラエルを現在に導いたのだ。独立前における、同国の唯一かつ最大の武器が、Institute だった。

文字通りの「刃」である軍隊も、イスラエルは建国前に先鋭部隊の整備を終えていた。それなくして1948年に始まった第一次中東戦争で独立直後のイスラエルがアラブ諸国を倒し、国家として存続することはなかった。

私が中東、特にパレスチナ/イスラエルを専門にするようになってから15年近くになるが、同国の在り様について強い危機感を持ちながら取材を行っている。対パレスチナ政策だけでなく、国際政治においても一言では語りえない影響力を持ち、日本の将来を左右しかねない国であるという認識でいる。イスラエルには「西側社会の危うさ」が凝縮されている。

一方、「戦略」には、畏敬の念を抱いている。余り知られていないが、第二次世界大戦が終わっても東方諸国に戻ったユダヤ人は、命の危険に晒された。結果、ホロコーストという犠牲を払ってさえ姿勢を変えない国際社会に

あって、彼らは将来を自ら作り出すしかなかったとも言える。問題の根源は欧州にあるが、その発露は中東の地になった。

同志社とは何か

イスラエルとの比較が適当かは別にして、同志社が日本有数の Institute であるのは確かだ。建学の父・新島襄は明治六大教育家の一人であると同時に、徹底した教育者であった。そして政治経済の中樞を担う人材の育成を前提に設立されたわけではなく、当初から「国家の中樞」からは距離を置く性格を有していたと言えるのではないか。京都という土地についてもそうである。明治以降の日本そのものといえる東京とは、正反対の位置づけの都市だ。「国家の中樞」に必ずしも存在意義を見出さない Institute、それが同志社だ。

第二次世界大戦後、一見戦前とは正反対の道を歩んできたように考えられてきた日本は、実は、政治・経済の中樞を担う集団という意味では戦前と変わっていない。そして、この明治以降の近現代日本国家の体制に限界がきている今こそ、同志社の役割が重要ではないかと、痛切に感じている。

同志社の存在意義とは何か。新島襄という人物の意思に表象される同志社は、「自治自立」であり、「社会貢献」だ。論壇の末席から眺めてみると、「反



知人の家族と(ガザ地区ハンユニス/2009年2月) 撮影: 藤原亮司

勿論この時、イスラエルという国家はこの世に存在せず、パレスチナの地において殆どのユダヤ人は移民であり圧倒的マイノリティであった(1914年時点で、ユダヤ教徒94万人、イスラム教徒+キリスト教徒約

体制」、「反権力」を謳う研究者やマスコミ関係者ほど「権威」を好む。そういう薄っぺらな在り様でない創立理念で、「中核」に拘らないからこそできる国家への貢献に努めることが、同志社イズムではないか。

「国家の中核」に存在するか否か、という観点だけでなく、「国家」が重視していなくても日本の将来を左右する国や地域についての研究や、(25年前にもカイロ大学への留学枠があり、驚かされたことがあるが)人材交流などの連携に力点が置かれるべきだろう。大学院グローバルスタディ研究所では、ガザ地区の大学との連携模索やアル・ジャジーラの元総責任者の招へいなどを行ったと聞く。同研究所の主要ポストに、同志社プロパーが名を連ねられるようになれば理想的だ。国内で言えば、(既に、一定レベルは行われているのだろうか)例えば地方行政への更なる関与や、「産業関係学科」等を軸とした地場経済との画期的展開などを期待する。

映画『リンカーン』の読み方

多くの同志社卒業生がマスコミに就職すると聞くが、個人的には関わったことがなく、組織内で影響力の大きい人物として話を聞いたこともない。記事や番組を利用して同志社の宣伝をしろというのではないが、メディアは世論形成に大きな影響力を持つ。関係者

を上げて、同志社出身のマスコミ人や研究者などに強くサポートするのも効果的だろうが、それに関連してこんな私見を紹介したい。

2012年に公開されたS.スピルバーグ監督作品『リンカーン』をご覧になった方も多いのではないか。その終盤暗殺される直前のリンカーンが、馬車の上で妻と話をするシーンがある。そこで彼は「聖地(エルサレム)に行きたい」という言葉を発するのだ。「ここまでやるか?」と私も正直呆れたが、真偽はともかく、実際にはリンカーンがこのような話をしたという逸話はあるようだ。いずれにせよかなり突飛なセリフであり、製作者の強い意図が背後にあるのは確かだ。

スピルバーグは、かねてから民主党を強く支持している。特に政治的な性格が強まってきた最近では、イスラエルの諜報機関モサドの工作員を主人公にした『ミュンヘン』を製作・監督するなど、作品にはつきりと親イスラエルの的な姿勢を投影させている。

推測の域を出ないが、『リンカーン』で彼は、「聖地に行きたい」と語ったというエピソードにインスピレーションを受けて映画の製作を決めたのかもしれない。奴隷解放が行われたものの選挙権を与えるべきに苦慮する映画の中の白人たちと、軍事占領を続ける「パレスチナ」(パレスチナ地域の約20%の面積)の独立に対し、更なる土地の要求や、非武装化を強要するイス

ラエルのユダヤ人の姿が酷似しているのである。

『シンドラーのリスト』などホロコースト関連の映画については多少異なった見方が必要ではあるが、スピルバーグが、ユダヤ人としての在り方を世界有数の技術力をもって体現しているのは確かだ。

その地位を確立し、圧倒的強さを誇るようになってからも、イスラエルは立ち止まらない。それが、イスラエルの立場を危うくしていると私は考える。

(イギリス委任統治下で)パレスチナと称された土地の80%の領有に留まらず、イスラエルは更に10%(合計約90%)の面積を管轄下に置く。この行き過ぎた統治エリアの拡張を、国際社会は概ね容認し、制裁を加えることはなかった。(仮にパレスチナの10%が「パレスチナ国家」になるとすれば、それは東京都の面積とあまり変わらない。)イスラエルのユダヤ人が書きなぐった「ダビデの星」を目にすることも珍しくない。例えば占領地に住むパレスチナ人の家のドアに、軍事侵攻した場所の建物の壁に、大きくはつきりと記され、そこが「ユダヤ人の土地」であり、「パレスチナ人は追放する」という意思を示している。ユダヤ人の迫害を象徴する行為を、今はユダヤ人自身が行っているのだ。

現在のイスラエルを肯定するのは難しいが、目的の実現方法とそれを続け

る意志の強さには学ぶべきところが大いにある。



パレスチナ人の家のドアに書かれたダビデの星 (ヨルダン川西岸地区ヘブロン/2012年1月)

我が同志社の今後を考える時、より明確な戦略が不可欠であると思えてならない。建学の理念を見つめ直し、そこに立ち戻るべきだ。

「自治自立」した大学であるためには「専門性」の追求が何よりも重要であり、それは「大きさ」よりも「深さ」とも言える。他者の追隨を許さない専門性がなければ、権力とは一定の距離を保ちながら影響力を持つことは不可能だ。

「一般」の中に埋没することのない「独自性」が伴わなければ、「社会貢献」は実践できない。新島襄の理念は、実現されてこそ意義がある。

人物点描・新島襄（そのⅢ）

木戸孝允との妙縁について

常任相談役 武谷 洋三（1969年法学部卒）

「教育」に寄せた木戸孝允の見識と矜持

校祖・新島襄の人間像を追跡して、いちばん驚かされるのは、人物交流の多彩さ、偶然と妙縁の数々、縁の不思議さである。新島襄と木戸孝允との「麗しき交誼」もその一つである。

二人は明治五年（二八七年）、米国ワシントンで邂逅する。木戸が「岩倉米欧使節団」の重鎮の一人であったことは言うまでもない。初対面で二人はあたかも鐘と撞木の「ごとく共鳴し合ひ、たちまち妙音を奏でる。

二人を結びつけたのは、明治初頭における新生日本の「教育」に傾けた私心なきひたむきな情熱であった。

「教育は国家百年の大計」という。明治維新に際会して、この教育にことのほか関心と熱意を払ったのが、木戸孝允である。木戸は熱く語っている。

『真に我国をして、一般の開化を進め、一般の才智を啓発し、もつて国の権力を持ち、独立不羈、たらしむるには、僅々の人材世に出ずるとも、難か

るべし。其の急務となすものは、只学校より先なるはなし』。

木戸は「維新の三傑」（西郷・木戸・大久保）の中で、最も開明的な国民皆教育の思想を早くから抱いていたのだ。新島の『国民教育はよろしく徳育に根基を置かねばならぬ』とする四民平等による国民教育論と、出会う以前から太平洋を隔てて重なり合っていたことがわかる。

実は木戸は米国に来てみて、当時の官員や留学生の「アメリカかぶれ」にひどく不快の念を抱き、かつ不安すら感じていた。

『前略』わずかな期間米国に遊歴し、その皮慮（表面づら）を学び、我国を軽視するの徒、少なからず。我国の本来所以（国柄・伝統）を深了（深く思いをめぐらすこと）せず、容易に米人の風俗を敬慕し、未だ己の自立する所以を知らず。みだりに自主か、共和か、軽躁浮薄（浮わつていて軽薄なこと）の説を唱え、善害を顧みず、ひたすら雑取（無批判に取り入れること）する。（中略）：想像するに十年後海に不安なるものあり

（後略）

煩をいとわず記したのは、木戸が新国家建設、文明開化の激動期にあつて、いかに微動だにせぬ見識と矜持を持つていたかを、知ってもらいたかつたからに他ならない。そこには国体・国柄を踏まえた確固不拔の「和魂」と、『良きを採り 悪しきを捨てて外国に劣らぬ国となすよしもがな』（明治天皇）の「洋才」とが不離一体となつた「明治の精神」の萌芽を見る思いがする。

後の、伊藤博文・井上馨らが推進した軽薄な「欧化主義」政策とははつきり一線を画しているのがわかる。そう言えば「五カ条の御誓文」は、最終的には木戸孝允がチェック・修正し作られたものだ。「旧来の陋習を破り、天地の公道に基クベシ」とか「知識ヲ世界ニ求め、大ニ皇基ヲ振起スベシ」などは、いかにも木戸が手を入れた感がしてならない。

木戸と新島の「合縁奇縁」

そんな木戸に、新島は燃ゆるがごとき「徳育（宗教）による経国済民」の立志の情理をぶつけたのである。初対面の十日後、一晚語り明かした後の（木戸日誌）には『彼（新島）の厚志篤実は、当時の軽薄浅学の徒が漫に開化を唱うるものとは大いに異なる。一見たちまち旧知の間柄のような心持ちをいただき、

頼りになる「益友」と感じた』（意識）ことが記されている。新島の「良心」に木戸は「感電」したと言っている。その後新島は、一行に請われて欧州各国を一年五カ月巡遊。一身の健康を犠牲にして欧州諸国教育制度に関する膨大な視察報告書（理事功程）（全十五巻）をまとめた。これはあの徳富蘇峰に言わせれば、『日本の文教制度の基盤の総べてとは言わざるも、其の主な部分であつたことは、天下にこれを知る者甚だ少ない』。

新島の数多ある「陰徳陰行」の一つとして特記しておきたい。

木戸と新島の交誼は、新島が明治七年十一月二十六日、十一年ぶりに再び故国の土を踏み、同志社設立に向けた艱難辛苦の間を通じて一層深まつていった。が、それはほとんど木戸の新島に対する一方的な「無償の支援」という形をとっている。その麗しい「君子の交わり」を深く洞察すれば、木戸の人物像もまた別な魅力と光彩を放つことを発見するだろう。

明治八年初頭、新島は木戸と大阪で合縁奇縁―再会を果たす。当時木戸は大久保利通らと対立して中央政府から下野、いわゆる（大阪会議）の中心人物として在阪し、征韓論破裂後の政局不安、議会開設や政体の在り方をめぐる政治改革の渦中にあり、当人の出処進退も含めて多忙を極めていた。

新島に心底惚れ込んだ木戸

そんな多事多端な折にもかかわらず、木戸は新島のためにしばしば貴重な時間を割き、同志社創建の志を励まし、心労を感さめ、幾多の周旋をいわず力を貸した。大阪府知事、同庁次官が共に長州木戸一門の人であったのを幸いに、再三にわたって『新島襄、浪華（大阪）の学校を民力を以て企てる一条に付き、余甚だその志を賛じ、渡辺知事に説けり』と、斡旋これ努めている。

さらにまた、長州・萩から大阪に出て成功を収めた、当時堂島米穀取引所理事長・磯野某に対しては、公園造成に寄付しようとしていた二万円（今日の五億円以上に相当か）もの大金を『いよいよ遊園を変じて学校へ出金いたせし様に説諭』もしている。木戸の新島に対する惚れようがわかる。

新島はこれをどう受けとめたか。木戸日誌に曰く―『新島襄来訪 磯野へ説得せし趣きを談じ置けり 彼もまた満足せり』とある。新島襄はなぜか当初、同志社設立の地を大阪に定めていたのである。

こうして順風に帆を受けたかのように見えた学校設立も、木戸が政府中枢の参議に復活し離阪するや、たちまち状況は一変する。すなわち、渡辺府知

事は一旦は時の大立者・木戸の面子と説得で不承不承承諾したもの、もともとが頑迷な耶蘇嫌い。設立に新たな二つの条件をつけてきた。一つキリスト教主義を標榜することはまかりならん。二つ―宣教師を雇用することは不可。これでは新島にとって学校設立の意義はゼロに等しい。新島は屈せず再三了解を取ろうとしたものの、結局は徒労に帰したのである。

切支丹邪宗の旧習いまだに脱しない頃である。新島の苦悩は深かった。この年四月、新島は失意を一洗するため京都に赴く。そしてあの盲目の名伯楽・山本覚馬との文字通り「運命の出会い」となるのだが、それ以降は前回到記した。

新島と木戸との麗しき交誼―それは、木戸が東京に戻ってから同志社設立の認可等をめぐって途切れることなく続くのだが、その背景にあったものは、明治維新期の烈々たる「愛国・憂国の情」「開国進取の時代精神」という共通の絆だったに違いない。

『邦家（日本）の前途容易ならず、三千万蒼生（人民）をいかにせん』と詠んだ木戸の憂念に、『小生、国を去りてより国を憂へ、民を愛する心、日に益し月に長く候故、何れ帰国の上、心力をつくし此道を伝へんとす』と応えた新島の至情が、見事に「連結」しているのではないか。その愛国の烈しさ

と愛民の深さは、南洲・西郷隆盛の「敬天愛人」の志操にも一脈通ずると思う。

前々回の（人物点描・新島襄―新島精神と武士道との相関について）でも述べたが、キリスト者・新島の宗教は決して一身の救いを求めた狭小偏頗なものではなく、武士道精神を根底に秘めつつ清教徒的な熱火をも帯びた、国を救おうとする経世済民の宗教であったことを改めて強調しておきたい。

新島襄と頭山満の意外な接点

最後に一点、愛弟子・徳富蘇峰の指摘した新島襄の意外とも思える一面を紹介しておきたい。

新島は一見、温良恭儉な紳士の外貌を装っているが、その実、『内心では秀才型の青年よりも「脱線型」の青年を好み、頭山満らが率いた玄洋社風の壮士を愛した「野暮男」だったという。

「頭山満」と「玄洋社」―。いずれも戦後これほど完璧に日本の近代史から抹消された歴史上の人物と結社はないだろう。だが明治・大正・昭和の三代に亘って「絶世の国土」と仰がれ、昭和天皇が摂政宮だった大正時代、その分厚い伝記（巨人・頭山満翁）が献呈されたほどの大人物だったとだけ、今は触れるに留める。

その頭山満に新島襄が、同志社大学設立に賛成してくれたことを『喜欣の

至り（まことに有難い）』と述べ、『改めて（賛助の）御依頼申上げ度く候……』旨のかなり長文の書簡を送っている。

徳富蘇峰の洞察眼を裏打ちする史料の一つで、新島の頭山に対する親近感も行間に漂う。

新島襄は臨終の床で十項目の「遺言状」を蘇峰に筆録させている。その中で特に目を引くのは『同志社に於ては「個儻不羈（活気にあふれ、制御に服さぬ、自立心旺盛なこと）」なる書生を圧束せず、務めて其の本性に従い、之を順導し、以て天下の人物を養成す可き事』という一条である。まさに古今を通じて教育の神髄を突く箴言だ。「個儻不羈」なる言葉には幕末維新の志士たちの魂と気位が籠もっていると思う。

国家においては「独立不羈」、個人においては「個儻不羈」―これこそが維新の精神をシンボリックに顕現し、明治日本興隆の精神的バックボーンとなったと言えまいか。明治十一年に結社した築前（福岡）「玄洋社」は、こうした精神を最も純粹に、かつ最も先鋭的に継承したものに他ならない。

新島襄は玄洋社風の壮士を愛した。今風の新島襄の人物像イメージとはおよそ違うではないか。「愛国」とか「国土」とかという言葉は今や死語と化しつつあるが、私は徳富蘇峰の新島論ほど適評はないと信じて疑わない。

（平成二十六年四月二〇日記）

2014年度年間活動予定&報告

幹事長 草野 賀文

2月	15日	第一回同志社校友会大懇親会 京都国際会議場にて開催 北海道勢20名を含む2200名の盛会
3月	20日	弥生例会 お刺身居酒屋 瑠玖 女性4名を含む21名参加 華やかな盛会 (例会は奇数月第3金曜日18:30から)
5月	16日	新入会員歓迎会 北の魚づくし 狸小路3丁目
	24日	同立戦(羊ヶ丘CC) プレー費11000円 参加費1000円
	31日	同志社懇親会 ルネッサンスサッポロホテル 校友会は女子大や各学校を含んでおります 総会と呼ばず「懇親会」と称し 集い易い雰囲気醸し出すようにしています
6月	14日	新島襄海外渡航碑前祭 函館弾丸バスツアー 参加費無料 家族同伴可!
7月	18日	文月例会 お刺身居酒屋 瑠玖 会費3500円 幹事 平井
	20日	“DOSHISHA Camp in Hokkaido” アウトドアコミティーが企画するキャンプです 今年羊蹄山山麓で行います
8月	8日	第15回 関西六大学札幌OBゴルフ対抗戦(羊ヶ丘CC) 昨年は26名参加
9月	19日	月見例会 北の魚づくし 狸小路3丁目 会費3500円 幹事 澤田 9月を旧暦表記すると長月です ホテルの立て看板に「同志社長月例会」と記載したところ 同志・社長月例会と読めてしまうので改名を指示されました
10月	11日	三好杯争奪ゴルフコンペ 故三好支部長に敬意を表し秋にゴルフコンペを開催しております
11月	11日	関西六大学札幌OB懇親交流会 交流会は本年度の関西六大学対抗戦優勝校が幹事をします 当月は樹徳会総会 小樽クラブ総会の開催月です
	21日	霜月例会 お刺身居酒屋 瑠玖 会費3500円 幹事 平井
12月	13日	クリスマス会 第2土曜・日曜日にクリスマス会を開催しています 会員家族約120名出席の大パーティーです 瘦ッチョのサンタや太ったトナカイが狭い会場を走り回り子供達にプレゼントを配ります

<http://doshisha-sapporo.org>

行事予定の詳細はホームページに最新情報を掲載しております、確認をお願いします。